



TITLE:

弘法大師將來健陀穀子袈裟について:刻絲と穀子

AUTHOR(S):

太田, 英藏

CITATION:

太田, 英藏. 弘法大師將來健陀穀子袈裟について:刻絲と穀子. 東洋史研究 1947, 9(5-6): 215-227

ISSUE DATE:

1947-08-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145839>

RIGHT:

弘法大師將來健陀穀子袈裟について

——刻絲と穀子——

太田英藏

「つづれ」と云ふ語は衲、則ち古い弊衣を裁縫して造つたものや、襪襦の類を云ひ、その語原は衲袈裟の衲にあるらしい。衲は綴なりと室町時代頃から云はれてゐたが、江戸時代の末頃に著された『機織彙編』などには「衲錦」と書いて「つづれのにしき」と振假名をつけてゐる。

近世、この技術は洛西の御室から興つたやうで、仁和寺の坊官がこの技術を工夫し育てたと傳へてゐる。

それ故、眞言宗とは縁故が深く、古くは弘法大師の健陀穀子の袈裟もこの綴錦でできてゐる。

御室で造られた頃は小規模なものであつたやうだが、維新開國の後、歐羅巴文明の刺戟を受けて、大規模なものが造られるやうになつた。上代では佛寺や宮廷を中心として大きな作品が造られ、その製作も盛大

つたらしい。その遺物の最も大きなものは當麻寺の中將姫感得と傳へられる藕絲曼荼羅である。また奉天の博物館に所藏されてゐる綴錦、則ち中國で云ふ刻絲の類も實に世界的な織物である。

東亞の綴錦は歴史も古く、その技術も優秀である。いま東寺に護持されてゐる弘法大師の健陀穀子の袈裟も、またその輝しい遺物の一つである。

*

私はかねて『請來目錄』の健陀穀子袈裟は綴錦でなければならぬと考へてゐたが、昭和十七年十月十三日、大賀博士及び私のつとめてゐる川島織物研究所員の數氏と一緒に拜觀を許され、その御袈裟の田相部を見て、確かに綴錦であることを確認した。そして私共はこの綴錦の傑作を目のあたりにして無量の感慨に

うたれたのであつた。

本稿は、織物の技術的な立場から、この健陀穀子を述べると共に、刻絲と穀子との關係から、この健陀穀子こそ『請來目錄』に云ふ根本のものと認めたいと思ふのである。

綴錦とはどんな織物かと云ふと、その組織は平織で、日常最も多く用ひられてゐる組織である。しかし、ただその構造はちがつてゐる。つまり經絲一に對して、緯絲はその三倍以上の密度がある。經絲は極めて強く伸張され、殆ど眞直ぐであるが、緯絲はこれに反し、急角度に經絲をめぐつてまがり、殆ど經絲を覆ひ包み、一見疊表の様な構造を持つてゐる。この點、博多織とは全く正反對のものである。

模様のある場合には、透して見ると、その模様の通りに經絲に添つて間隙が見える。これを我々は「羽釣孔^{あな}」と云つてゐる。つまり緯絲は端から端迄、則ち耳から耳まで通つてゐない。その爲に緯絲の密度は部分によつて違つてゐる。

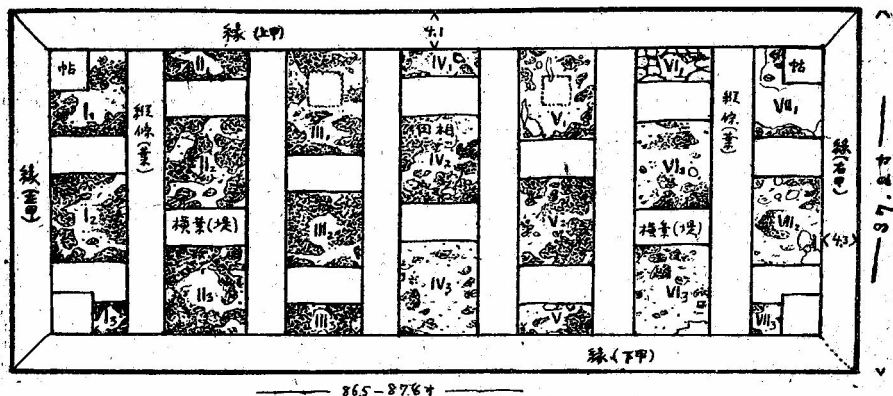
經絲も多少密度の相違が認められるが、平均曲一寸間に五十三本である。緯絲は粗いところで百二十五本、

密なところで二百八十本、平均すると百九十三本となる。經絲一に對して緯絲は三、四倍の割合で織られてゐる。

經絲は練つてあるやうに見えぬが、捻子と同じ方向に二本撚り合せた絹絲である。近代では緯絲は練つた光澤の豊かな撚絲を用ひるが、上代の綴錦は大抵平絲で織られてゐる。これは豐潤な色澤が賞美された爲めと考へられる。

經絲の直徑は、目測で〇・二耗位、經絲と經絲との間隔は〇・五耗乃至〇・六耗位、そしてその隙間は〇・三耗位であつた。則ち、〇・五乃至〇・六耗ある經絲と經絲の間へ、太さ〇・一耗を下らない緯絲が約四十度に近い角度で交錯してゐるのである。かうした構造は當麻曼荼羅ともよく似てゐるが、密度は多少この方があらい。

健陀穀子は柄風の模様、則ち叢雲狀に織出されてゐる。(口繪圖版)そしてその色と色との境目に羽釣孔が見える。この羽釣孔は、錦や綾や刺繡などに全く見られぬ綴錦獨得の特徴である。つまり、羽釣孔のあることによつて綴錦であると斷定することができる。そ



第一圖 健陀穀子袈裟實測圖

(大賀一郎博士作圖に據る)

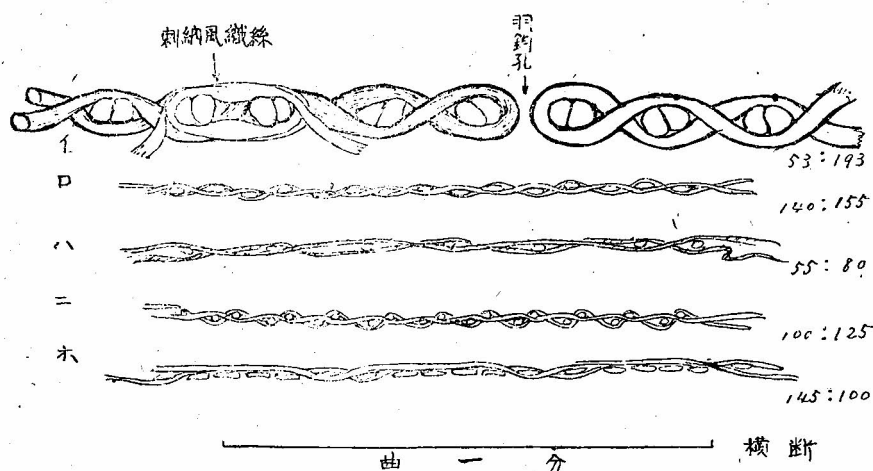
れで私はこの袈裟の田相部にある叢雲狀の模様ある織物を綴錦と認めるのである。

つぎにこの袈裟を、上代綴錦の遺品と比較してどんな特徴があるかといへば、まづこの紫の絲で縫つたやうに見える部分である。それは不思議にも針で縫つてゐない。ただ縫つたやうに見せて、實は織つたのである。(口繪及び第二圖イ刺納風織絲)したがつて、これはこの袈裟が造られた當時のもので、斷じて後からの補修でない。

つぎはこの袈裟全體が殆んど量しの方法で織られた點である。そしていま約十種程の量し方が識別される。當麻曼荼羅のやうな繪畫的圖様を織つたものに量しがなく、模樣的な健陀穀子に量しがあるといふことは、上代綴錦遺品の異例である。この點は綴錦技術史上興味のある所で、宋の刻絲に見る量しの原始的手法をここに見出すものと云へよう。

*

つぎに綴錦とはどんなにして造られるか。このことを一應諒解しておかないと、この袈裟が織物上どんなに貴いものであるかといふことが理解しにくいとおも



第二圖 健陀穀子袈裟織物重層圖

ふ。現在西陣では、鍔で指の爪を鋸齒状に磨き、彩緯を搔き寄せ、搔き寄せして、下繪どほりに織つてゆくのである。空引機（紋機）を用ひず、下繪の線にしたがつて小杼をえらび、その形のとほりに緯絲を積みあげてゆくのである。上代といへども、おそらくこれと同じやうな方法で織つたとおもふ。

この田相部に用ひられた綴錦の幅は曲九寸位である。いま二十一の田相を引き延ばして見ると、約十七尺四寸となる。九寸幅で十七尺餘のもの、これを織るに要する日数は大體二百八十二日位と計算される。しかるに、一年の勞働日数は約三百日としたものであるから、これを今日造るとすれば約一ヶ年の時日を要することになる。一日に六分ほど、則ち紫の緯絲が約一分ごとに通つてゐるから、これを六段程織るのが一日の仕事量であつた。しかし、現在よりもつと餘裕のあつた頃であるから、これだけのものを織るのに、尠くとも一年半や二年を要したとみて誤りはないとおもふ。後に引用する『鶏肋編』や『松漠紀聞』、さては『大慈恩寺三藏法師傳』なども、一衣を織るのに歳、または數歳を要すると述べてゐるから、私の推算ともほぼ

一致する。

綴錦はどんな複雑な模様でも、またどんな多様な色彩でも、手間を惜まなければ、自由に織り現すことができる。しかし、錦は種々の技術的制約があつて、綴錦と比較すると非常に不自由である。健陀毘子には、約十種の色と、その濃淡を混へ、量しの種々の方法を用ひてゐる。地質から發する美しい絹光、黄味の茶を主調とした色、それらが總てのものを高貴にする古色と混然融けあつて、色彩の大曼荼羅を繰り擧げてゐる。眞に莊觀といふほかはない。

健陀毘子の美しさは全くこれらの色と光との綜合の莊麗さである。繪畫とは全くちがつた美しさをもつてゐる。工藝としての特殊な美しさである。

*

さてそれでは、この健陀毘子の袈裟は果して大師の「請來目錄」にあるそれに間違ひないであらうか。このことはすこぶる重大な問題であつて、種々の方面から論證されねばならないとおもふが、私はなによりもまづ毘子の語から論じてみたいと思ふ。

それについては、まづ東亞における綴錦の概要を述

べる必要がある。私はこの袈裟も當麻曇茶羅も唐代からの傳世品であるとおもふ。中國には發掘品以外、唐代以前のもののあることを知らぬが、中央亞細亞の樓蘭やニヤの廢址、北蒙古のノイン・ウラからは、漢代の綴錦が出土してゐる。しかし、これらには漢人の作でないとおもはれるものが多い。

文献上、後漢から六朝唐宋へかけて織成の名でよばれてゐる織物がこれであるとおもふ。東大寺獻物帳には七條の織成樹皮色の御袈裟一領といふ名稱がみえる。

これは純然たる綴錦ではないが、しかし綴錦的な要素からなつてゐる。それで樹皮色御袈裟に冠された織成の語を綴錦と解してよいとおもふ。

『大安寺流記資財帳』にも「織成佛像」一張といふ目がある。しかし、織成の語は適當な名をつけがたい變つた織物に對して間々用ひることがあるので、よほど慎重に判斷しないといけないことがある。

『後漢書』輿服志によると、織成錦は陳留郡襄邑に産するといふ。けれども綴錦の技術は、西域から中國へ傳つたやうにおもへる。綴錦の織方は今日でも極めて原始的な方法で織てゐる。古くから機織の技に優れ

てゐた漢人が、これを工夫したと考へられぬことはないが、正史の「西域傳」に屢々織成のことを述べてゐるのと、中央亞細亞の發掘品が埃及のコプト裂等と共通した織表はし方をしてゐるのを考慮にいれると、西域の織技が中國に傳つたのではないかとおもはれる。

*

それで穀子の語であるが、綴錦のことを支那では刻絲と書く。刻絲が穀子に通ずるかといふことは、文字・言語の上で問題がある。しかし、大師の健陀穀子が綴錦である以上、穀子と刻絲との同一を信ずる出發點にはなると思ふ。

刻絲と穀子とは日本では同音であるが、中國では異つてゐる。この語が中國で用ひられたのは宋代にはじまり、唐代まで溯りえないやうである。これに先立つものは織成の語であるが、何故この刻絲が織成の語に代つたかは判らない。後世の中國の學者たちは、大體刻絲といふ織物、つまり綴錦は宋代にはじまるものと考へてゐたやうである。

北宋から南宋にかけて在生した莊綽の『鷄肋篇』によると、刻絲が綴錦であることは疑へない。それは、

機法が大機を用ひないこと、緯絲が全幅を通貫しないこと、それに透してみると羽釣孔があるといふことから明らかである。それに羽釣孔が恰も彫鏤の象の如くであるから刻絲といふのだとさへ云つてゐる。そのほか詳しく記してゐる特徴を一々檢してみると、全く綴錦の特徴と一致するのである。

明頃になると、刻の字は正字でないとの説も出てゐるが、織成の語も、元以後あまり用ひられてゐないやうである。

莊綽と同じ時代の人で『松漠紀聞』の著者である洪皓は、十數年間、滿洲北支に流寓してゐたが、燕山、則ち今の北京で回紇人が刻絲を織つてゐたといふことを記してゐる。これが刻絲であることは前後の文章で明らかである。

また『遼史』儀衛志二には、小祀に際して皇帝が國服紅色克絲龜甲袍を召すと書かれてゐる。また南宋末の著である周密の『齊東野語』には、御府の書畫は克絲を裝潢に用ひたと記してゐる。

北宋の熙寧七年十月、神宗は我が入宋僧成尋に托し、自筆の經文、錦卷等を我が朝廷におくられたが、

この金書法華經七卷には、尅絲の表、銷金の裏が用ひられ、勅筆の裝潢としても用ひられてあつたよしである。要するに刻、尅、尅の四字は同音同義の異字である。

以上四字のうち、一番古くて年代的に確證のあるものは『續資治通鑑長編』卷六十一の景德二年十一月己卯の條と、『契丹國志』卷廿一にある刻絲の語である。

それには宋帝の誕生日と元旦の國信禮物に達から贈られた夥しい綾錦があり、そのなかに刻絲の御衣というものがある。私はこれをもつて刻絲といふ言葉の初見とするが、實に北宋の末年を溯る約百二十年前のことである。『鷄肋篇』の著者莊綽よりはるかまへのことである。したがつてこの刻絲の語は彼の創始ではない。傳承によつたか、或は直接綾錦を見て憶斷したかわからないが、とにかく羽釣孔を彫鏤の象として刻絲といふ字を用ひ、またその義を解したものとみえる。『鷄肋篇』の刻絲の製法と特徴を記して精しいことには敬意を拂ふが、彼の刻絲の語の解釋には、必ずしも賛意を表することはできない。

明の周祈は『名義考』のなかで、刻の義を不詳とし、

『廣韻』にある緯の字を用ふべきであると主張してゐる。しかし緯の字は辭書以外に用ひられた例は未だ見ない。もしこの周祈の説に賛成するとすれば、『廣韻』にある「織緯也」といふ訓によるのであるが、それは綾錦の緯絲が經絲の三倍もあつて、緯絲ばかりで織つたやうな感があることによるのではなからうかと思ふ。そうするとこの周祈の説もなかなか捨てられないものになる。しかし積極的にこれを肯定するだけの資料は見當らない。

緯は原本『玉篇』によると、紕の意味で鍼で縫つたもの、則ち織つたものではない。宋本『玉篇』澤存堂本には緯が前後二字あつて、前になく後にのみ見えてゐるが、これは宋代に追補されたものらしい。

以上述べたやうに、宋の頃では刻、尅、尅、尅、どの字でもよかつたらしい。『鷄肋篇』の著者が刻の字を本義であるやうに論じてゐるのは、おそらく憶斷によるものとおもふ。

日本では穀子と刻絲の音は變らないが、支那では必しも同じであるとは云へない。しかしこの二つの語は同じでないにしても、ごく近似の音であるとおもふ。

慧琳の『一切經音義』に、穀は洪祿反、或胡木反と見え、子は『廣韻』では、祖似切である。刻、克はともに『集韻』によると、乞得切で、絲は新茲切である。同音でないにしても近似音である。それ故、私は穀子の音から刻絲、克絲に轉じたのであらうかと、素人考へながら解釋してゐるのである。

*

つぎは穀といふ織物のことである。『倭名類聚抄』には古女の和訓がつけてある。慧琳の『一切經音義』卷四十五には、羅穀を注して、「羅に似て疎、紗に似て密なる者なり」とある。明らかに薄地の織物である。

羅は網目狀に織られ、菱文を表はしたものである。絹とは織物的にちがふ。紗は方目の疎く透けたもので、穀は羅と紗の中間のものでなければならぬが、いまは絶えて傳はつてゐない。穀は紗の緯絲と緯絲の間になほ一越織り込めるやうに工夫したものとおもふ。ちやうど健陀穀子のV₁とVII₁に綠色有文の薄物が補縫されてゐるが、これが正に當るものであらう。

第一 この袈裟は健陀穀子といふから穀を綴つたものと云へるかも知れないが、穀は薄地の絹織物で、穀と綴

錦とは全くちがつた織物である。ちやうど穀と穀子との關係は、薄物の羅や紗と、薄物でない毛織物の羅紗とが文字をおなじうして織物が全く違ふに似てゐる。近世緞子とか縐子とか、織物の名稱に子の字が用ひられてゐるが、唐代ではまだこの例をみないやうである。

前に述べたやうに、綴錦は漢代の昔から西域の技術的感化によるものであり、その後も「西域傳」に記すやうに、引續いてこの種の織物が輸入されてゐたらしいから、穀子はむしろ西域のことばを音寫したのでないかと、私は考へてゐる。つまり織物の穀とは關係がないと解するのである。

この健陀穀子の穀子の語を綴錦のことと解すれば、『弘法大師御傳』卷下に開成四年正月三日、青龍寺の義真等から實惠等へ法具羅綾等を贈つた回章中にある「白穀子二疋」、また明の顧起元の『客座贅語』に唐の諸州の綾羅物産を擧げた中にある荊州の穀子は、やはり綴錦と解すべきで、唐代では一般に綴錦のことを穀子と云つたのではないかと思へる。

何も弘法大師が後の者を困らせる爲に、わざわざ難

解な穀子の語を選ばれたのではないとおもふ。

*

大師は健陀穀子の外にもう一つ綴錦の袈裟を所持してゐられたやうである。『御傳』の卷下に承和四年四月六日、實惠等が青龍寺へ贈られたものの中に、金緯袈裟一具とある。金緯は金縷、即ち金絲を用いたものである。正倉院や法隆寺の上代袈裟を通覧するのに、金絲を用いたものは綴錦や刺繡、紐等に限られてゐる。錦には見當らない。しかも、綴錦の當麻曇茶羅には全體に金絲が織込んである。それで大師の金緯の衲も恐らく健陀穀子と同じやうに綴錦であつたものと推察される。

唐代では朝廷下賜の衲袈裟に綴錦のものが少くない。『大慈恩寺三藏法師傳』卷七にも、高宗から鉞線の出入する所を知らない衲袈裟を下賜されたことがみえ、また同書には道恭、慧宜の二法師も、梁の武帝から先師が賜つたと同様の袈裟を着てゐたと記してゐる。鉞線の出入なしといふ衲袈裟とは、まさしく正倉院の織成樹皮色風のものであつたに違ひないと思ふ。

然るに健陀穀子はこれとやや趣を異にして、恰も鉞

線の出入のあるやうに造られたものである。技術的には一步進んだものと云へるが、その莊麗といふことがらへば、金緯の衲袈裟がはるかに立派なものであつたに相違ない。かういふことは、律の規定にはないかも知れぬが、盛徳の法師の故に許容されたことであらう。健陀穀子の如きも、惠果和尚が代宗とか徳宗から勅賜されたものと思はれるが、『小野纂要』の云ふやうな、月支國から傳つた三國傳來のものではあるまい。それはその製、その彩がたしかに物語つてゐるのである。

*

それでは健陀穀子の穀子の語は我國ではどのやうに解釋されてゐたか。南北朝頃の果實僧都の撰になる有名な『東實記』には、「穀子は絹名也。羅穀といふが如し。今當寺に納むる所は衲袈裟也。」とある。僧都は『請來目錄』の記載と護持の袈裟とが合はないことに些か不審を抱いてゐるやうであるが、穀子の御袈裟は決して薄物であつてはならないのである。

また源平争亂の渦中に記録された覺清の『養和二年後七尊御修法記』には「尋常に似ず實に希代の物也」と

いふてゐる。當代の字書類に織成とか刻絲の語は見當らないが、鎌倉時代から漸次文獻上に姿を表はして來る綴錦の當麻曼荼羅も、單に「織佛」といふ語を以て表はされてゐる。織方とか地質とかに就いては殆んど具體的な記載を缺き、全く神秘的なものとして考へられてゐたやうである。それ故、我國中世では綴錦の造られた證據がない。むしろ造られなかつたのではないかと考へられる。

*

杲實僧都の『東實記』などが穀子の語に解釋がつかず、東寺傳承の御袈裟に一抹の不審を抱いてゐるに拘らず、御袈裟は嚴然として一千百年の間相承護持されてゐる事實を直視する時まことに大師遺徳の廣大深遠を身にしみじみと深く感ずる。いまこの御袈裟の田相部は斷爛し、殘缺した状態にあるが、正しく惠果阿闍梨が付法の印信として、弘法大師に授けられた當時のものとして考へられる。

附屬の横被は『養和二年御修法記』に緋色の大蓮唐草の唐綾で珍重なものと述べてゐる。私の拜見した處では、『御修法記』の記事によく一致してゐる。いまの

赤味がかった茶色は、もと緋色であつたものらしい。その模様を織り出した技法や組織、莊重な羽釣の調子などは正倉院の古裂と全く軌を一にしたもので、大師時代のものとして考へて差支へないと信ぜられる。幅は一尺八寸餘のものを半截して縫ぎ合してゐるが、全幅一模様の雄大なものである。

條葉や裏などは後の修補であつて、『東實記』によると仁治二年三月十七日から四月十日迄の間と、徳治三年に修補されてゐる。

杲實の同記によると、後醍醐天皇の嘉暦四年六月廿五日、東寺の寶藏に群盜が亂入したことがある。御袈裟の裏絹のみを剝取つてもち去り、表の田相部は他の重寶と共に寺邊で見出されたといふことである。現在の牡丹唐草の文様ある唐綾の裏は、群盜亂入直後の修補と考へられるが、しかし縁及び條葉は裏と同時のものか否かは問題である。群盜が裏を剝ぎ取つたといふことであれば、當時裏地は修理ができてゐて盜賊の欲しがるやうなもの、則ち金品に代へ得る新しさのものであつたやうに考へられる。だから御袈裟に相當根本的な修理が既に行はれてゐたものと推想される。

御袈裟の最下層の紫綾（地、紋共六枚綾）は、この嘉暦の時のものらしい。第二 織幅は一尺五寸である。

その上に重ねられた箴目の見える生の薄地白絹も、同幅である故にその時のものと推定される。第三 この裏

地の紫綾の用糸は極めて扁平となつてゐる。第三 これは生絲で織つた綾絹を、棒等に巻いて槌で打つた所謂撚練を施したもので、光澤と柔らかさを出したものである。

昭和十八年秋、奈良帝室博物館に出陳されてゐた南山大師と鑑真和尚の兩像の表装に用ひられた綾は、この種の裂で、南北朝の應安五年の讃がある。それ故嘉暦の修理と考へて間違はあるまい。『東寶記』に見える盜賊の記事も事實のことであらう。

田相の綴錦の直下にある白地練絹は、處々綴錦に糊付され、或は綴錦の位置を示すため、隅に仕立の際の墨打があり、また奈良時代の純、絹のやうに経緯密度が殆んど同数である。田相の綴錦と共に根本のものと考へて良からう。第二

御袈裟を形成する五層のうち、中層の白地の薄絹は、緯絲を左上りの強撚を掛けたものである。この種の織物、正倉院裂中にもある。唐代以前からの織物と

考へて差支へない。『倭名類聚抄』が「緘」「則ち之々良岐」と訓してゐるものに當る。第二層の絹とこの第三層の強撚の薄絹との幅は、兩者共同幅であつたか、自分の手記が不充分であるためわからない。

縁及び條葉は羯磨と輪寶の紋様のある紫の綾（地は三枚綾、紋は六枚綾）である。生のままで、撚練された跡がない。（口繪圖版）この縁や條葉の下に有文の青綾（地・紋共に四枚綾）が處々に芯のやうにして縫込まれてゐる。絹風は紫綾の縁、條葉に近いが撚練の跡が多少窺はれる。健陀毘子袈裟拜觀後、昭和十八年八月二日、高尾神護寺藏「金字一切經」の經帙を川島織物研究所によつて調査したが、その經帙の裏に使用されてゐる緑色の綾（地・文共四枚綾）は、十種類の文様があり、この青綾によく似てゐた。經帙の方は、毀損部から窺はれる竹の副骨部に、久安五年の墨書が一再ならず見出されたが正倉院裂の華文風の文様ではなく、また裏地紫綾とも多少趣が異つてゐる。

『養和二年御修法記』に袈裟と横被の甲、並びに裏は

紫の唐綾とあるのみで、模様などの記載はないが、色は合つてゐる。『御修法記』には根本のものに非ざるかと疑つてゐる。

『東寶記』には仁治及び徳治の修理が記載されてゐるのみで、養和以前の修理の記載がない。大賀博士の研究された處についてみても、やはり確かな修理記録とおもはれるものはない。仁治及び徳治の修理の時に縁、條葉、裏等が取換へられたか、養和以前に既に取換へられてゐたか、記録の上では判然しない。『御修法記』に甲、並びに裏を根本のものにあらざるかと疑つてゐること、綾の文様や織風から推して養和以前の綾とするのが妥當のやうに考へるものである。

修理の補縫も何回となく施されてゐて、複雑を極めてゐるため、一部についてのみ見たのであつたが、穀子と第二層の練絹とが縫綴られ、第三層の絨には無關係と見えた。またこの二者とともに前述の緑色の穀と名づけられるものが縫綴られてゐる。それ故縁穀は相當に古いものであることが知られ、絨は後から芯として補はれたものであることが明白である。そのほか、Vの部に各種の小裂を柄風に補綴した處もある。かく現

在の健陀穀子袈裟は惠果以來の根本のものに、養和以前のものと嘉暦のものとの三つのものから成つてゐると考へられる。

*

かく健陀穀子袈裟の田相部は大師請來の根本のものであり、横彼も『請來目錄』に明記されてゐないが、唐代のもの、縁及び條葉は『養和二年御修法記』に記載されたものと認められ、裏は嘉暦に成つたものらしい。

私は一技術者で、歴史の方面には暗いが、織物の上から観ると健陀穀子の袈裟は『請來目錄』通りのものに相當し、惠果阿闍梨から付法の印信として授けられたものがその根本をなしてゐるとみられる。いま、いづれも國寶の海賦文蒔繪箱に納められ、大師開基の東寺に相承護持されてゐるのは肯なるかなである。

いま拙筆にあたり、この貴い秘寶の拜觀を差許された東寺の當局、またその研究に助援を與へられた大賀一郎博士及び川島織物研究所々長川島甚兵衛氏、並びに同所々員諸兄に深厚なる感謝の意を表する。

追記 本稿は昭和十八年六月十五日京都專門學校講堂でもよはされた弘法大師誕生紀念講演會の講演「刺絲穀子綴錦

に就て」の速記を基とし、その後の考へを追加したものである。同日の講演では、なほ理學博士大賀一郎氏の「弘法大師御請來健陀穀子袈裟について」と上村六郎氏の「木蘭色に就て」の二速記録がある。

穀子・刻絲・緯絲等の使用例

穀子

請來目錄 空海撰(日本) 大同元年十月廿三日上表

弘法大師御傳所收義真等回章(唐)

開成四年閏正月三日

客座贅語

(明) 唐代記錄ヨリ抄録カ

刻絲

續資治通鑑長編卷六十一

李燾撰(宋)

景德二年十一月己卯ノ條

契丹國志卷二十一

葉隆禮撰(宋)

右ノ書ト同年カ

東軒筆錄

魏泰撰(宋)

哲宗元祐中ニ記スカ

鷄肋編

莊綽撰(宋)

紹興三年二月五日自序

冠絲

參天台五臺山記 成尋撰(日本) 熙寧六年二月一日

刻絲

松漠紀聞

洪皓撰(宋)

天眷二年ヨリ皇統二年間ニ於ケル燕山ノ見聞

游官紀聞

張世南撰(南宋)

紹定五年跋

夢梁錄

吳自牧撰(南宋)

克絲

遼史儀衛志二

脫々等勅撰(元)

齊東野語

周密撰(南宋)

至元廿八年辛卯序

輟耕錄

陶九成撰(元)

至正廿六年序

緯絲(織緯)

唐韻

孫愐等奉勅撰(唐) 天寶十年序

大宋重修廣韻

陳彭年奉勅撰(宋)

大中祥符四年十一月十五日序

大廣益會玉篇

同

(宋)

大中祥符六年九月廿八日牒

緯絲

名義考

周祈撰(明)

萬曆十一年八月序

